

60

## 日本海海戦におけるロジェストヴェンスキー提督の 受傷状況と治療経過

柳川 鍊平, 坂井 建雄

順天堂大学大学院医学研究科 解剖学・生体構造科学

日露戦役における日本海軍の医療活動については、海軍省医務局『日露戦役海軍衛生史』（以下、『衛生史』）、同『The Surgical & Medical History of the Naval War Between Japan & Russia during 1904-1905』、海軍軍令部『明治三十七八年海戦史 第四卷 医務衛生』と、2つの部局から発刊された3つの公刊戦史が現存しているものの、本文の内容および文面は同一であり、これらの何れもが代表的な症例として96例を列挙している一方で、『衛生史』のみが上記96例に加えて付録写真集（日本人74例+ロシア人62例の写真に氏名・診断・経過概略を数行ずつ併記）も掲載していることは第117回日本医史学会総会で報告した通りである。それぞれの本文中で、第四章「主ナル戦闘死傷者ノ略歴」の第四節「頭部顔面及ヒ頸部ノ創傷」には患者「ジノウキー、ペトロウキッチ、ロジェストヴェンスキー」の診断名について「前頭部挫創兼前頭骨外板骨折 右大腿挫創 右内踝挫創兼骨傷 背部挫傷」と記されている。一方、日露戦役当時の佐世保海軍病院長でありロジェストヴェンスキー提督（以下、提督）の主治医を務めた軍医総監の戸塚環海が残した『日露戦役醫事摘録』と題された論文（以下、戸塚論文）には、提督の診断名について「1 前額部挫創兼前頭骨骨折、2 右大腿部及左足部挫創、3 背部擦過創」と記されており、前頭骨骨折と右大腿挫創とは両者で一致しているものの、足関節の挫創については左右が異なっている。そこで、ロシア側の戦闘記録として残る『露艦隊三戦記』の一つである『露艦隊幕僚戦記』と2004年に発見された家族宛の私信とから、提督の受傷状況および治療経過を検証した。

提督が司令長官として座乗していた艦は、艦隊の旗艦である戦艦「クニャージ・スヴォーロフ」であったが、同艦が日本海で司令塔に被弾した際に提督も頭部・左足関節などを負傷し、佐世保に入港するまで何度も意識消失を繰り返していたとされている。戦艦「クニャージ・スヴォーロフ」が指揮能力を喪失した後、提督は幕僚らの手に支えられながら駆逐艦「ブイヌイ」へ移乗した。移乗後に軍医が診察した時点で、提督は右肩・右足も負傷し、左足部からは動脈性出血が続いていたとされる。駆逐艦「ブイヌイ」乗艦の間は被弾していないものの、既に機関を故障し石炭も尽きかけ、ウラジオストクまでの航行は不可能と判断されたことから、さらに駆逐艦「ベドローヴィ」に移乗した。同艦は間もなく駆逐艦「漣」に捕獲され、翌日「漣」を含む日本海軍軍艦4隻に護衛されて佐世保に入港。提督は佐世保海軍病院へ搬送された。以上の経過から、この海戦を通じて提督が主に負傷したのは、戦艦「クニャージ・スヴォーロフ」司令塔への被弾の時であり、受傷機転としては砲弾の破片による二次爆傷であったことが推察された。

一方で、2004年になって提督本人が家族に宛てた30通の私信を子孫が保存していたことが明らかにされ、2009年には日本語訳も公表されている。その内の5通は佐世保海軍病院入院中に投函されたものであったが、更にその内1通の文面から提督は両足を負傷していたことが窺われ、さらに「右足で立つことはできるが両足で立っていることは無理」とも記されていることから、左足の方がより重症であったことが示唆される。

以上の検討から、提督は頭部・右大腿部の他に左右両足部を負傷していたが、右足部の負傷が比較的軽微であったために戸塚論文では左足部の創傷のみを診断名に挙げたものと考えられた。他方、『衛生史』など3つの公刊戦史で診断名に左足部の負傷が含まれないばかりか、解説部分に右足部について戸塚論文での左足部と同様の記述がある一方で、より重症であるはずの左足部についての記載は全く欠落していることから、公刊戦史の記述は誤（転）記である可能性が疑われる。